へ13
3031
1

48
ヘ13
3031
1-6

ヘ13 特
3031
1

昭和九年
六月二十四日
購求

北雪美談

時代加賀見

初編

為永春水作

一壽齋國貞画

国弓 蓬林堂梓

北雪美談 時代加賀見 新編

為永春水作

一壽齋國貞画

初編上

作題曲亭主國画

時代

初編上

若与梓

春水作

國貞畫

北せいびそうん　初春のうらぐさのうえん

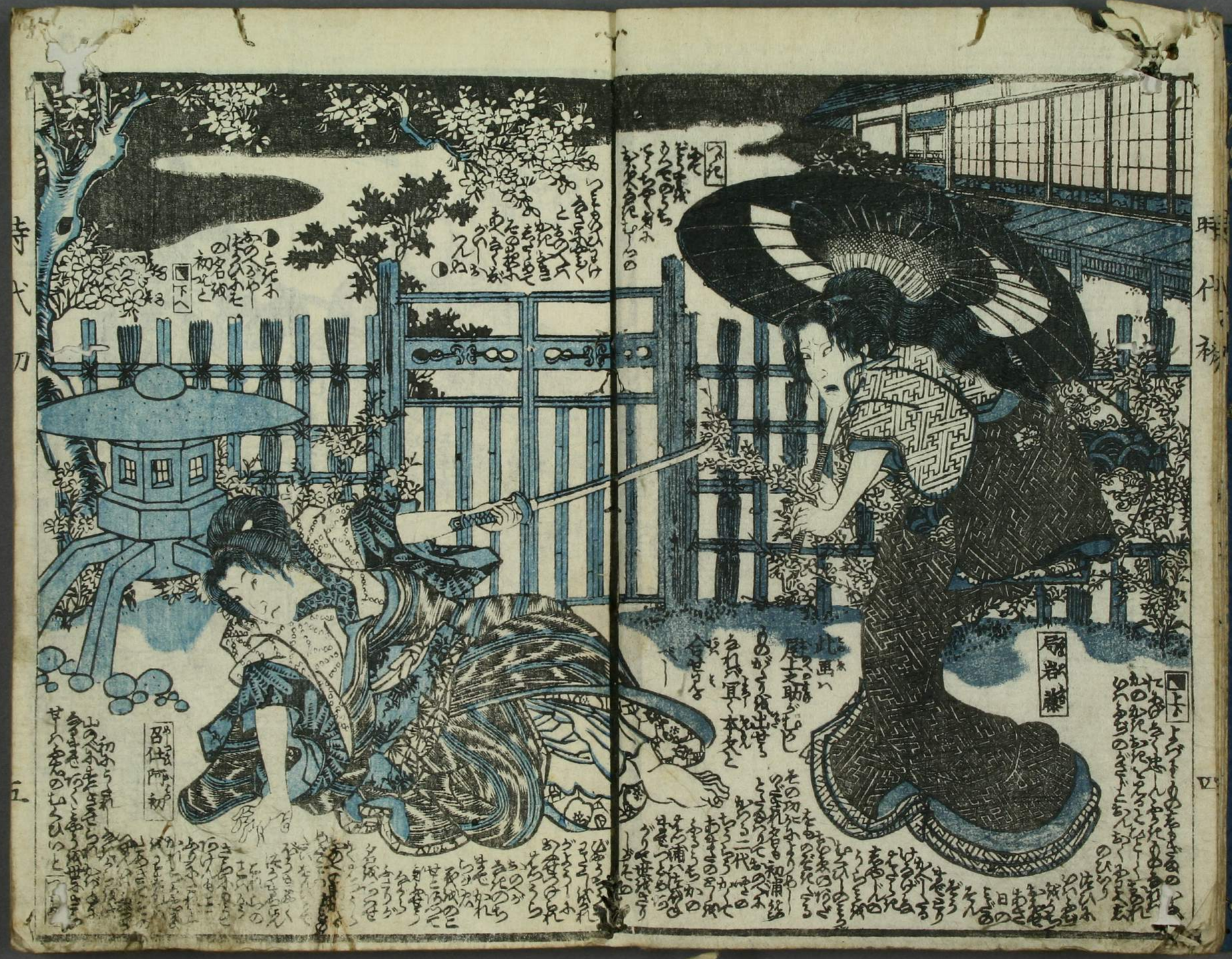
見の池の東へ。朝霜の日ざし渡つくくり解け。七ツ梅の空陶へ前夜の伝ふ北面して。雪封じわど最寒しと。明詠のうたふ獨座の一興。是さく春の且りけり。昨日の兎の門禮者も。黒羽二重の折目よく。三筋かもめを听ゆる鳥追。糸遊さそふ紙弐鳶の音。白酒の声宝船。夫等も春の景物とおもへども。いもざんざらん。然べ僕も試筆紙と若水。さして摺る墨ふ。名仏成凝らも一小冊い若林堂が預の懇望。外題ふもるいち北雪美談。画組成時代ふ恍せんふ。

時代鏡と名号しい。巻ふも聊因いる。岩藤尾上ゲ後日のいくしそ又来る歳の初賣紙。今ゝ急ぐ初仕入是ぞ書房の店先へ吹込む春風。作者ゲ。拙ないるぐゝも一時の新案。遣羽子よりもえんぐゝよく。當つく落ぬふ評判ふ婦幼稚兒達ふ願ふと手鞠拍子ふ序文ゝら。先ふ祝儀ふかゝふ記しつ。

嘉永八稔卯の春麦市

爲永春水述

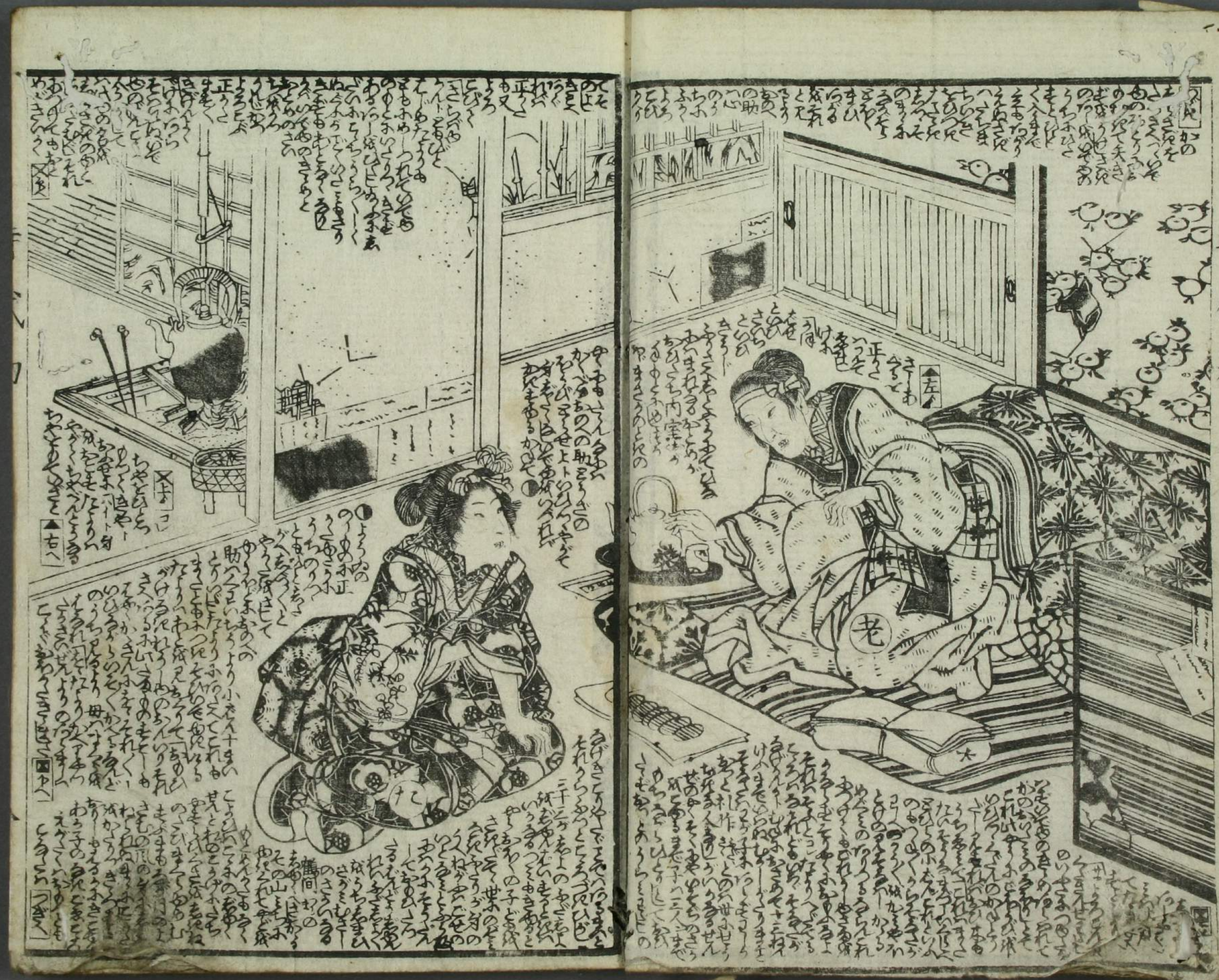
富家の一族
湯尾刀監
連道少殿子
同苗安波太郎
敦連
二編ふ出る
岩藤の亡霊
初浦
星三助
忠次
多賀の大領
正方


時代刀
時代物
召仕阿初
屋敷

白鷺の湯の監觴

尾

正


左へ
老
右へ

さびの女

若紫由可理双六　光彦作
五十三次見立双六　豊國画
水滸傳豪傑双六　一勇齋國芳画
東海道俳諧双六　應賀校合
天地人長久雙六　應賀作
豊國画

東錦繪

御進物箱入數品

初編下

司馬若林画

時代加賀鶴

雲美淡
梅梓

時代初
梅

正
花

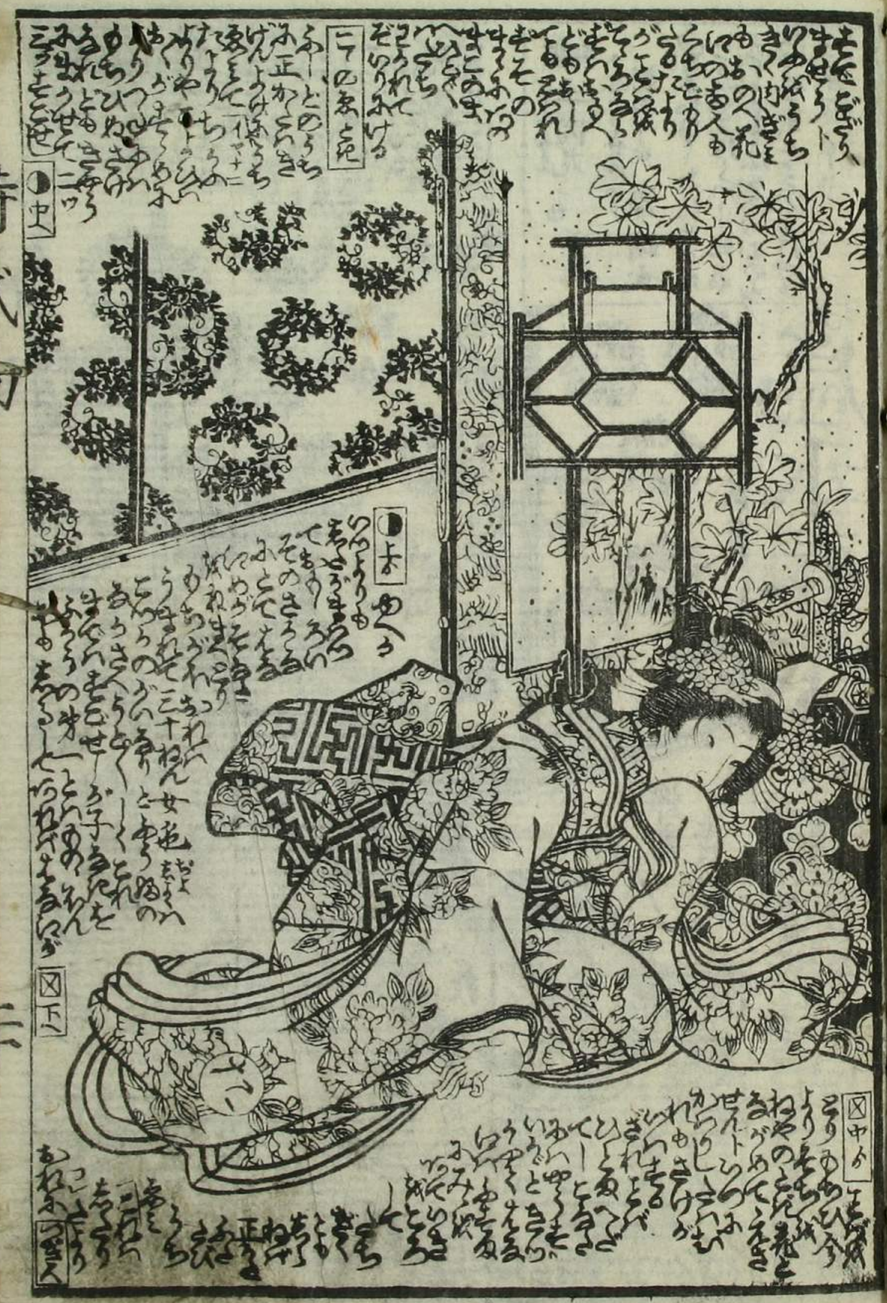
て
寸

田右の大
田
正

正
田中の大

正
尾
花

尾
梅
花



嘉永八年乙卯春新鐫目録

庭訓武藏鐙　五編　万亭應賀作
六編　一壽齋國貞画

鄙物語業平草紙　三編　立亭光彦作
四編　一壽齋國貞画

繪本武勇英名記　全四冊　壽庵自笑作
一勇齋國芳画

北雪美談　時代加賀見　初編　二編　三編　爲永春水作
一壽齋國貞画

地本草紙問屋　若林堂　芝神明前　若狹屋與市

外題豊国画
歌川國貞画
二編上

小雪みぬ淡雪の河代続こゝ梅の上
まさるまさる玉貞志こゝ
芝祢の子若枝在枝

世ふ夢多き人あり。病健労逸就論せば眼と
閉ぢれば則夢む。素より夢い信ぜざるべ。言
て又信ぜざれば是迄多つけ〳〵正夢とのみ。淫邪発夢の
論のごとくに。北山醫話よりもふかく。説出さんと
思ひしが。怎さく夢の講釈のこゝ。這半頁
のもりやもらん。基とも児戯の策子なるべ。

▲さらふ

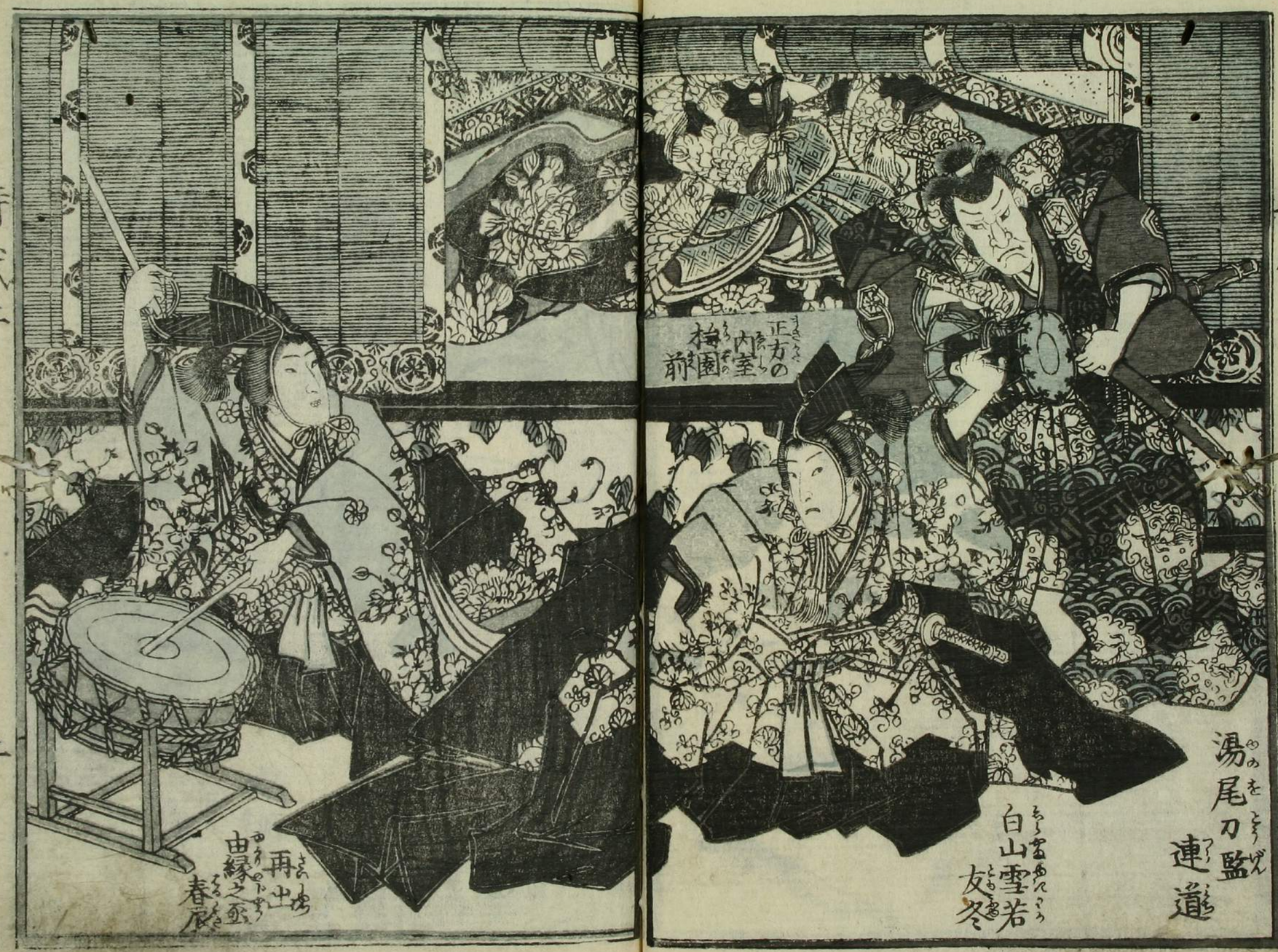
あ由縁を亟
ぶ血筋の縁
證拠るんどいく〳〵
ざる穿鑿。

◑ひるる長。
世ふ臭名紙遺
もとの。其いとゞちの赴向ふ倦さく。偖へ今の夢多ることを
言ひもく其場へ迎られども。かそうまに何とも。作者の用い
薄紙ふ似れば夢ふ要見さるる良城巻首ふ録と端文ふ換ひ

ふ岩藤ふ。素生を
聴く忽地ふ。赤ところ紙◑

嘉永八歳丑の初春

烏水春水誌


湯尾刀監
連道
白山雪若
友冬
正方の
内室
梅園
前
再出
由縁之盃
春辰

長谷部文内
婿
船越惣吾
化花婆郎
卜先
前大領正國の
愛妾
早浪

正かず
湯屋刀監
作者 白山雪若
つぐん
右軍
左軍

由
雪

若紫由可理双六　光彦作
國盛画

五十三次見立双六　豊國画
國貞画

水滸傳豪傑双六　一勇齋
國芳画

東海道俳諧双六　應賀校合
廣重画

天地人長久雙六　應賀作
豊國画

繪半切
千代紙
東錦繪

御進物箱入數品

此振物は好次第金八分五厘仕立
格別下直にて差上申候
尤表用向く社佛に差上

北雪美談 時代加見

和泉八郎

国芳

芳梅

二編下

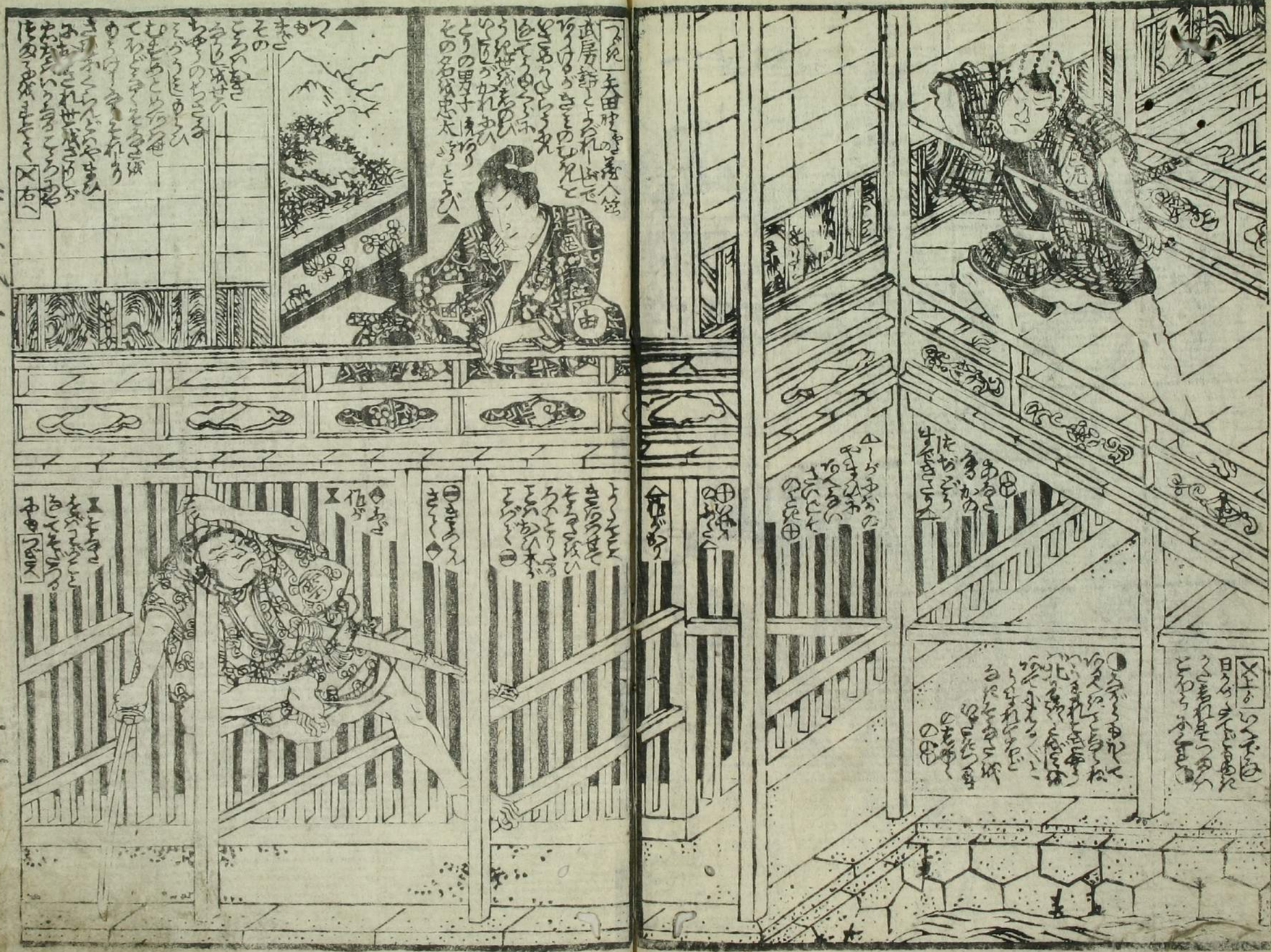
北雲
美筵
時代加々見
春水化　二編の下
國貞画　為永文彦

由

岩

仇花姫四郎

正国



刀
文

嘉永八年乙卯春新鐫目録

庭訓武藏鐙 五編 万亭應賀作
六編 一壽齋國貞画

鄙物語業平草紙 三編 立亭光彦作
四編 一壽齋國貞画

繪本武勇英名記 全四冊 壽庵自笑作
一勇齋國芳画

北雪美談 時代加賀見 初編 二編 三編 爲永春水作
一壽齋國貞画

地本草紙問屋 ◈ 若林堂 芝神明前
若狭屋與市

北雪美談
時代加二見
二編
春水作

内閣文庫

三編上
歌麿画

這冊子は初編の序より正月発兌と言葉をあらため
復世編の口画より初春の吉祥物にかけ様ぶりを
学ばい先初春のお年越の年玉のお扇子代りに書物にて
為のよと書林の云るふ任せ一のく侍く候しき小冊なれども
昔と今ハるのちう或ハ十編廿編の長篇の行いるを序文なんぞ余
計な物まで一快毎ゑ出るとなく出でき変も像花信のみる
はしのまの侍るあり付ぐる侍よ出定りの這は冊を楽して
序文とう毎そ出る冊つ　初の冊

爲永春水誌

藤浪
由縁の之丞
春辰

三國の里
阿曽比白糸

白糸の
雛妓
絲遊
玉琴屋の
亭主才六

白山
雪若
下奴
關内

白
由

白
糸

由

由
白

糸
白

刀

國貞画

春水作

若紫由可理双六　光彦作
國盛画

五十三次見立双六　豊國画
國貞画

水滸傳豪傑双六　一勇齋
國芳画

東海道俳諧双六　應賀校合
廣重画

天地人長久雙六　應賀作
豊國画

繪半切千代紙
東錦繪

御進物箱入數品

此摺物は好次第金子五両に仕立
特別下直売致候上方にて限為
方に用向く社備に致候

北斗七星の春
美談
時代加々見
新撰史

為永春水作
一壽斎國貞畫

為林堂壽梓

三編下

小童美談

卯の春
新作

両代かゝ見

三編ひとし

美水作
國貞画

文梅堂
發行

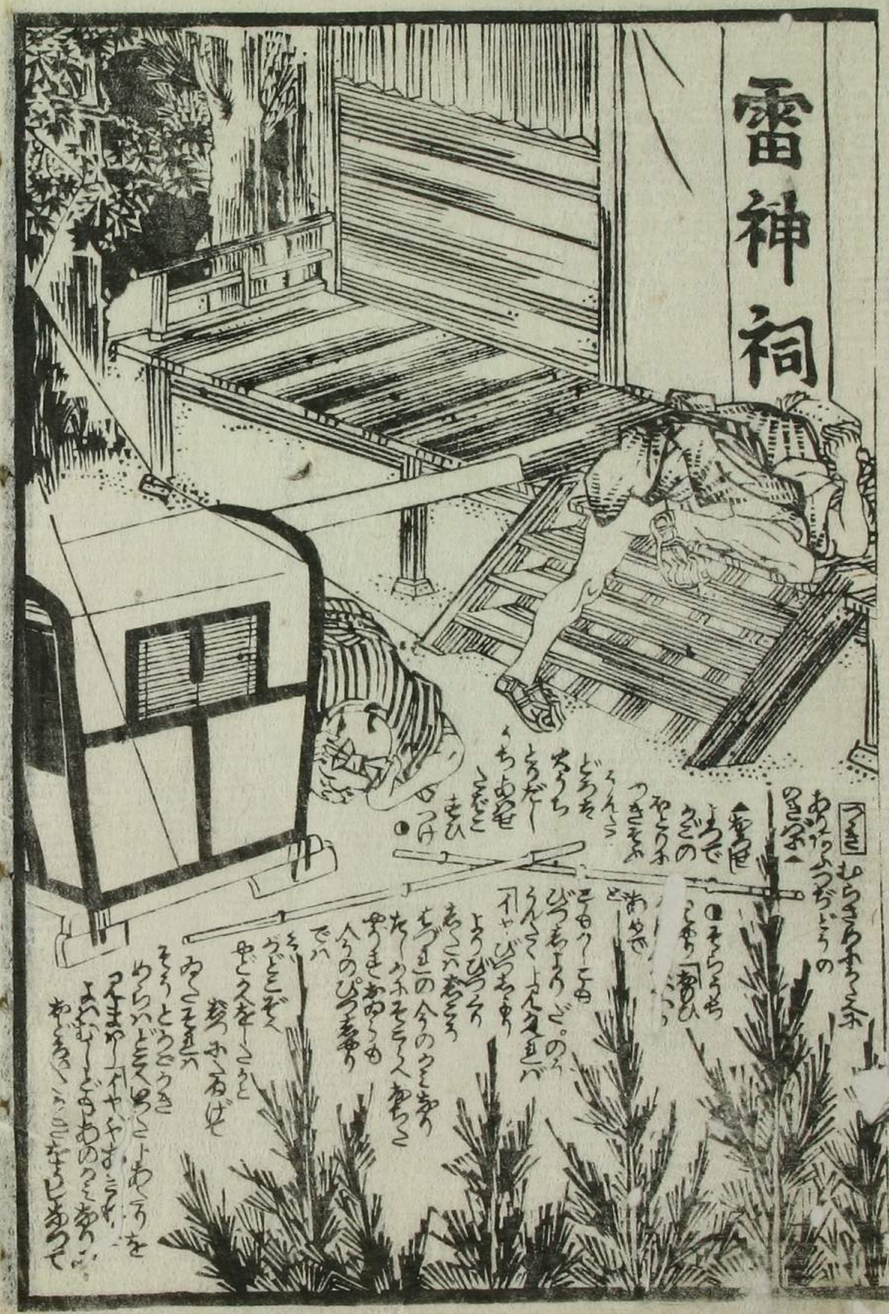
泥

刀
雲

糸
刀

白

泥
雷


雷神祠

泥

雲
由

泥
由

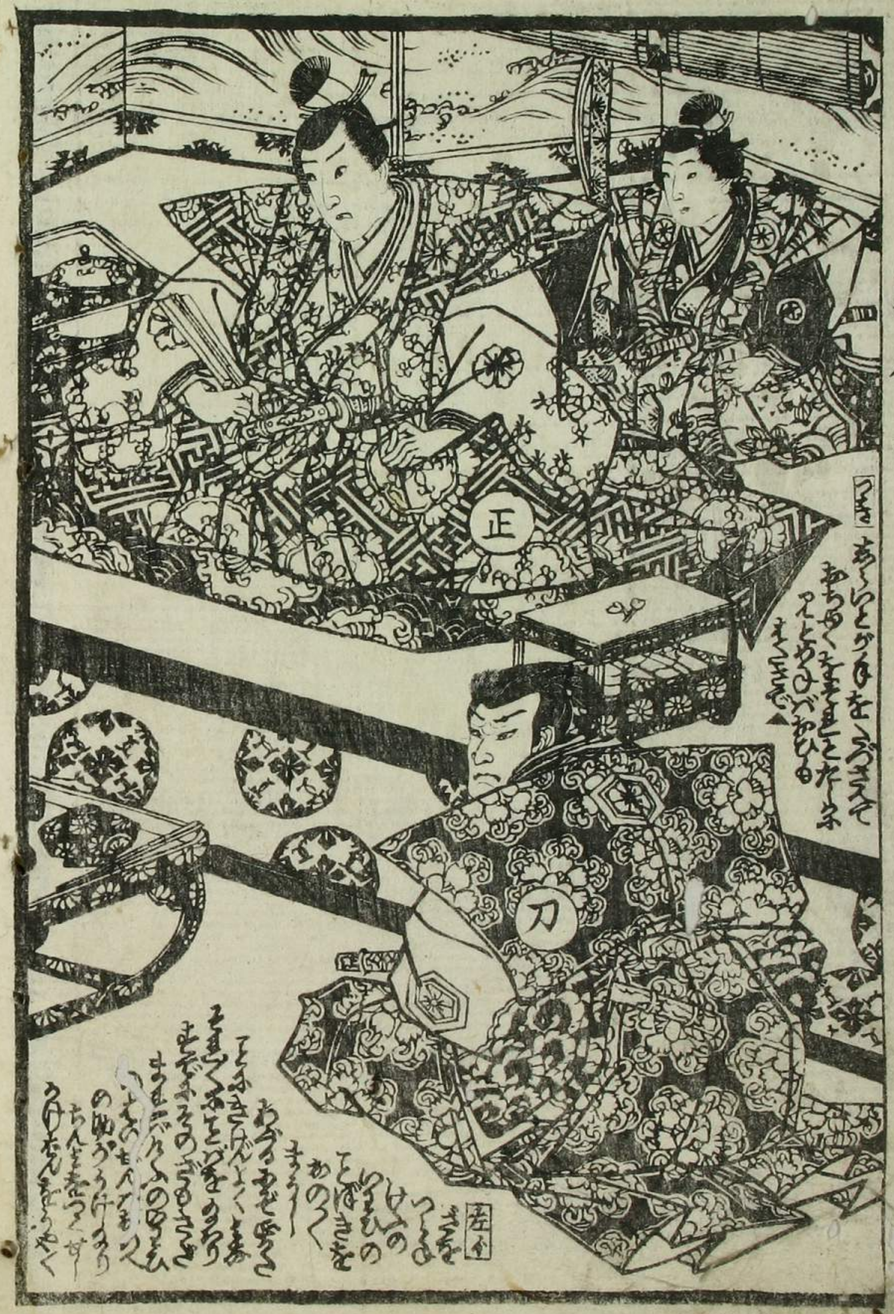
白

雪
白

由

由
白
笑

雪


正
刀

尾

嘉永八年乙卯春新鐫目録

庭訓武藏鐙 五編 万亭應賀作
六編 一壽齋國貞画

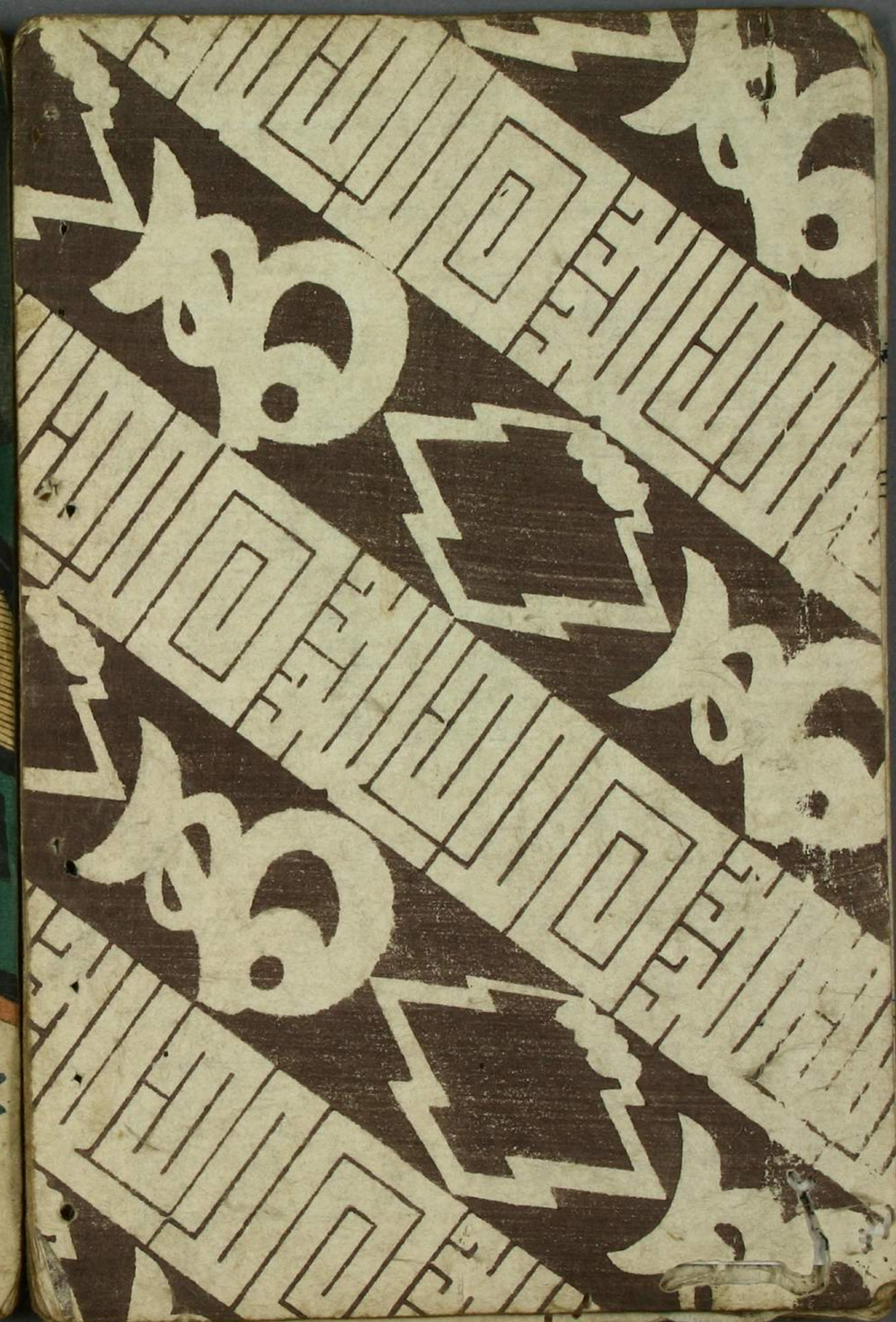
鄙物語業平草紙 三編 立亭光彦作
四編 一壽齋國貞画

繪本武勇英名記 全四冊 壽庵自笑作
一勇齋國芳画

北雪美談 時代加賀見 初編 二編 三編 爲永春水作
一壽齋國貞画

地本草紙問屋 ◈ 若林堂 芝神明前
若狭屋與市

外題夢之國
四編上
一壽齋國貞畫
寿梓



北雪美談
時代鏡
平華十集
巻之四
国貞画
坂原
泉英堂

丙辰新刻

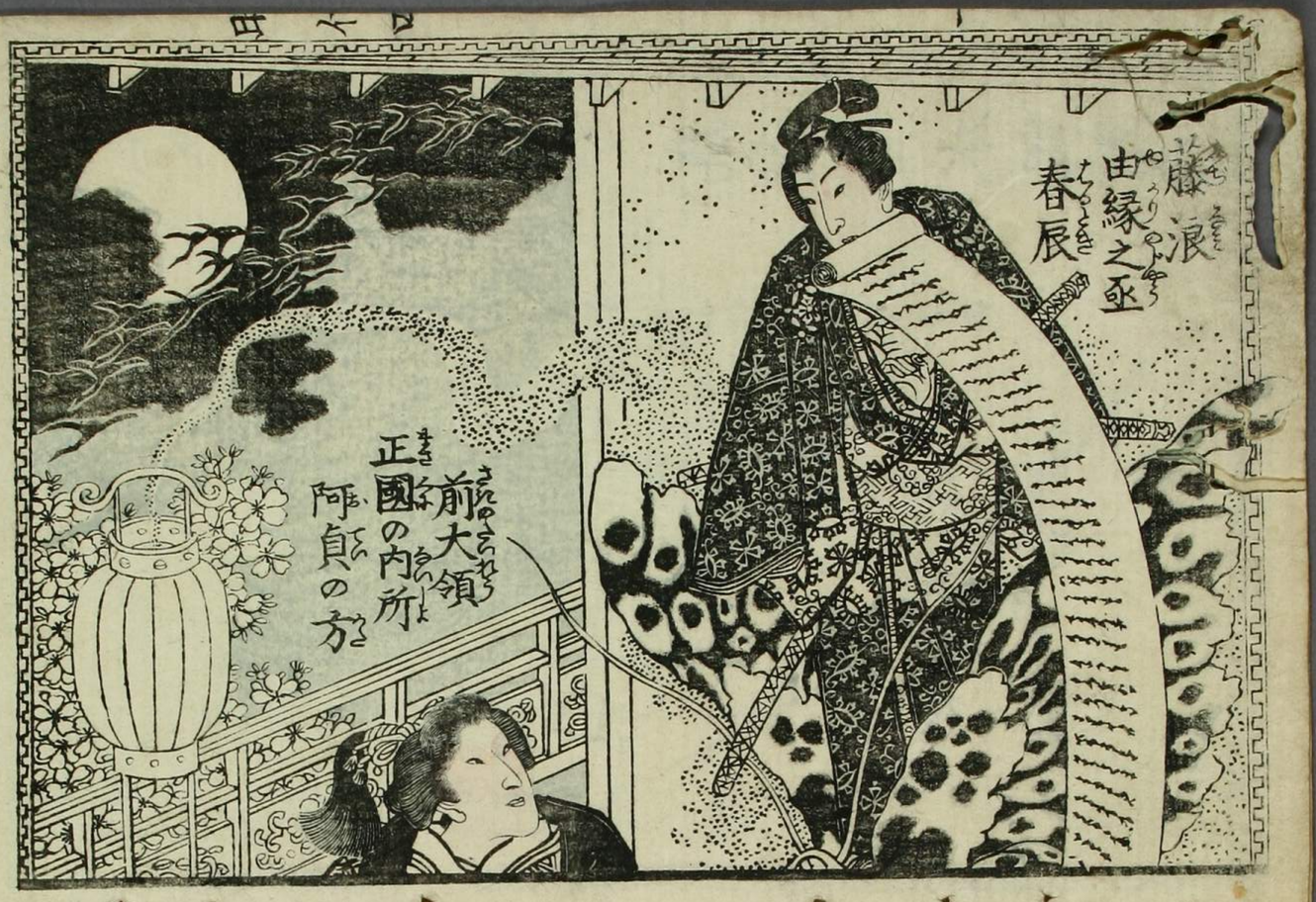
一

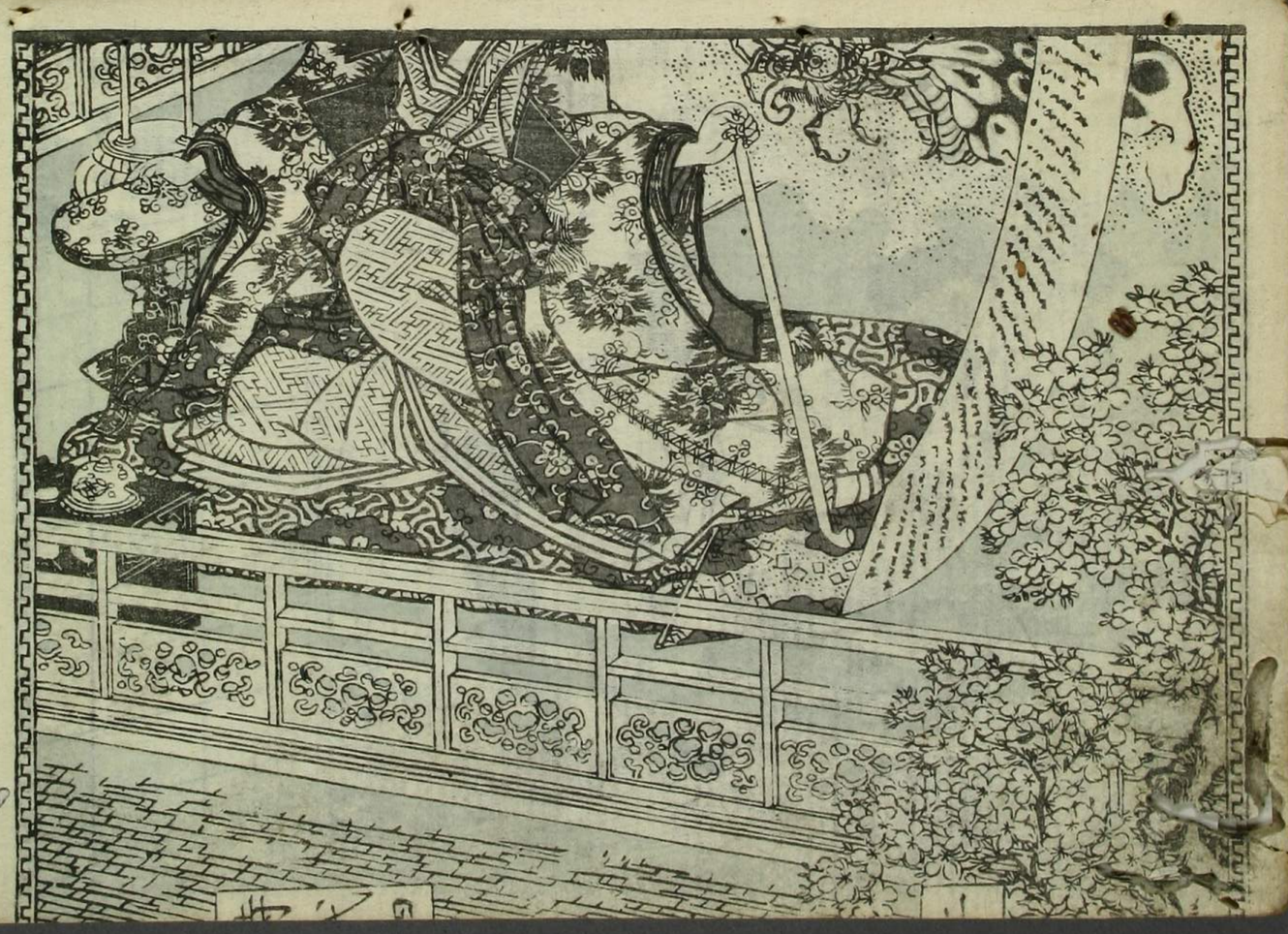
時代四

稗官者流の根原ハ那蒙人の
寓言ハ善惡勸懲ゝ旨と
ゝ雖れど近き屬の画双紙ハ或ハ何の
妖術とゝ奇々怪々の條ゝ設て画組ハ工を
を尽さねバ婦幼稚童の御意ハ悃つゞ尓バ
由縁ゞ夢の中ゝ岩藤ハ授らもするかの妖蝶
の一段より只管蝶ゝハ〳〵ゝ莊子ハ〳〵ゝ菓子の
上ハ翩々然とゝ筆ゝ飛〳〵ぬ

安政三年丙辰陽春

烏永春水記


藤浪
由縁之亟
春辰
前大領
正國の内所
阿貞の方



勝頼
老臣の
直諫
自害
勝頼
乱世
妻と
入水
井み

刀
由

正

尾

正
由

二
異変を聞て
群臣多賀の
館へ馳集る
尾

花
正
梅

由

立
刀

由
士

刀

水雪美談 時代加賀見

自二編至五編 春水作
自六編至終 國貞畫

四編五編は湯尾刀監が正方を毒殺のきうんと做つる悪由縁之丞が奸智をもて故意と毒計を破るの段より明神の杜おかるて初て由縁が刀監が胃中の機密を明とふくろう毒婦小笹が出身の趣を続て正方の自通ゆて小笹が芦荒駒を乗るよりして小笹白糸が試合の一段終ふ両人召抱られて小笹は笹尾と改名ゆ〜白糸は苅根とゆる支又かの化花坂四郎早良ぐり怨念駕籠とゆり由縁が奸計を助るの奇談忠臣丹下を謀るの赴き六編は丹下を謀りて自殺さゆかの駕籠の血〜を以て正方が心を乱さゆ丹下が養女〜萩が難義を鳥屋万助が娘思羽が救ふよりして可笑きゆるの物語思羽が小萩の夫要之助ふ恋暮の情態七編は思羽が恋情ふ募り鶏の姿をゆるその一説白山雪若が問貞の方と相計ゆて刀監等が隠謀を探るゆ方便八編は鳥屋万助が嘗を由縁が百両ゆて買んとのゆより万助が義侠の一段刀監が計られて〜既ふ大事の破きんとゆる由縁が鰥の術ゆ〜防ぎゆよ〜多賀の騒乱ふゆる

北雪美談時代加々見

辰の新年史

四編下

三
上の巻のつゞき
鳥屋慢
女兒思羽
暁毎ゝ鶏の
形相を做も
綜ハ後の篇

刀
由

立

正方の別腹の舎弟
吉千代
此画ハ由縁之
巫ゲ物語の中絵写
出せ
合せ
耳

阿貝の方

笹
由

刀
六

立
由
笹

刀

刀
由

立
世

正
由

由

遊

由
笹

安政三丙辰年春新版目録

壮雪美談 **時代加賀見** 四編より八編まで 爲永春水作 一壽齋國貞画

鄙物語業平実録 四編五篇 光貞画 國貞画

彦別武蔵鑑 古編 歌川貞重

雑談雨夜質庫 初編より追出版 爲永春水作 一陽齋豊国 一曜齋國郷画

地本草紙問屋 若林堂 芝神明前 若狭屋與市板

北雪美談
時代加々見
五編上
若林堂
壽梓
北雪美談
時代鏡
第五編
為永春水作
歌川國貞画
若林堂梓

北雪美談時代鏡

第五編上之巻

爲永春水作
若林堂文庫
蝶楼園貞画

什麼這策子の表題と時代加々見と名号へる加々見と鏡字訓通へど。硝子鏡の最薄紙冊子ホ一いつたくふ時代の人情世態をうつ取る紙ぶうもう書賈の需ホ二寸間紙合鏡の急案い水鏡より淡々一紀ホも色紙條と長々と引伸鏡ホ為ると色前後の赴向の混乱を开処と這処と紙ぶたつまつく。結び合せ一紋鏡ホつの鏡の愚ろ。

見紙次第見の見返らむ作者ぞ見ぜつぞ見ぜ抜

鏡の大きな顔自惚鏡と

御見物の墨ら鏡と

叱ると打粉で磨く古鏡も。

聊光ると出さん〜

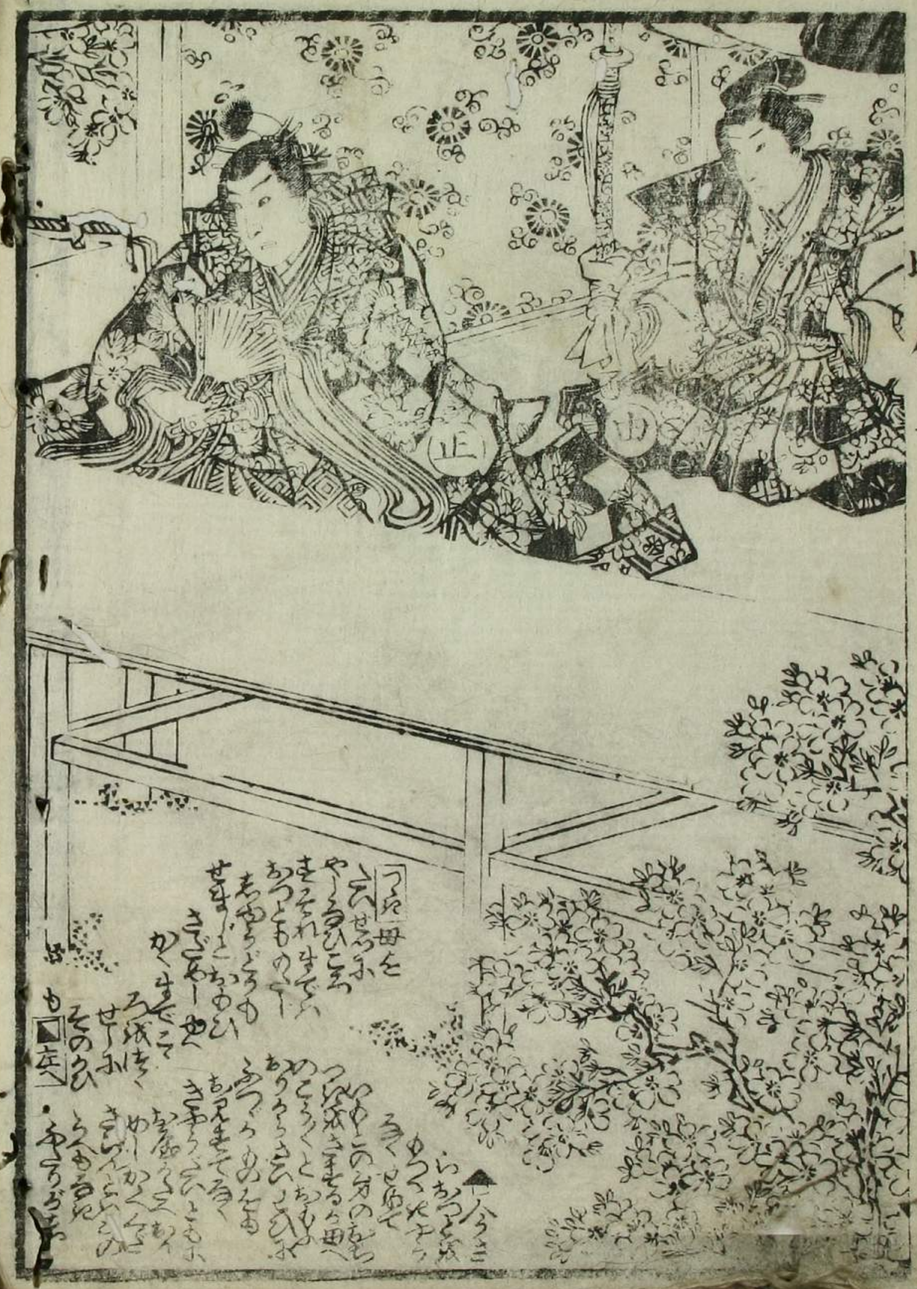
安政三年辰三月暮歳市
爲永春水誌

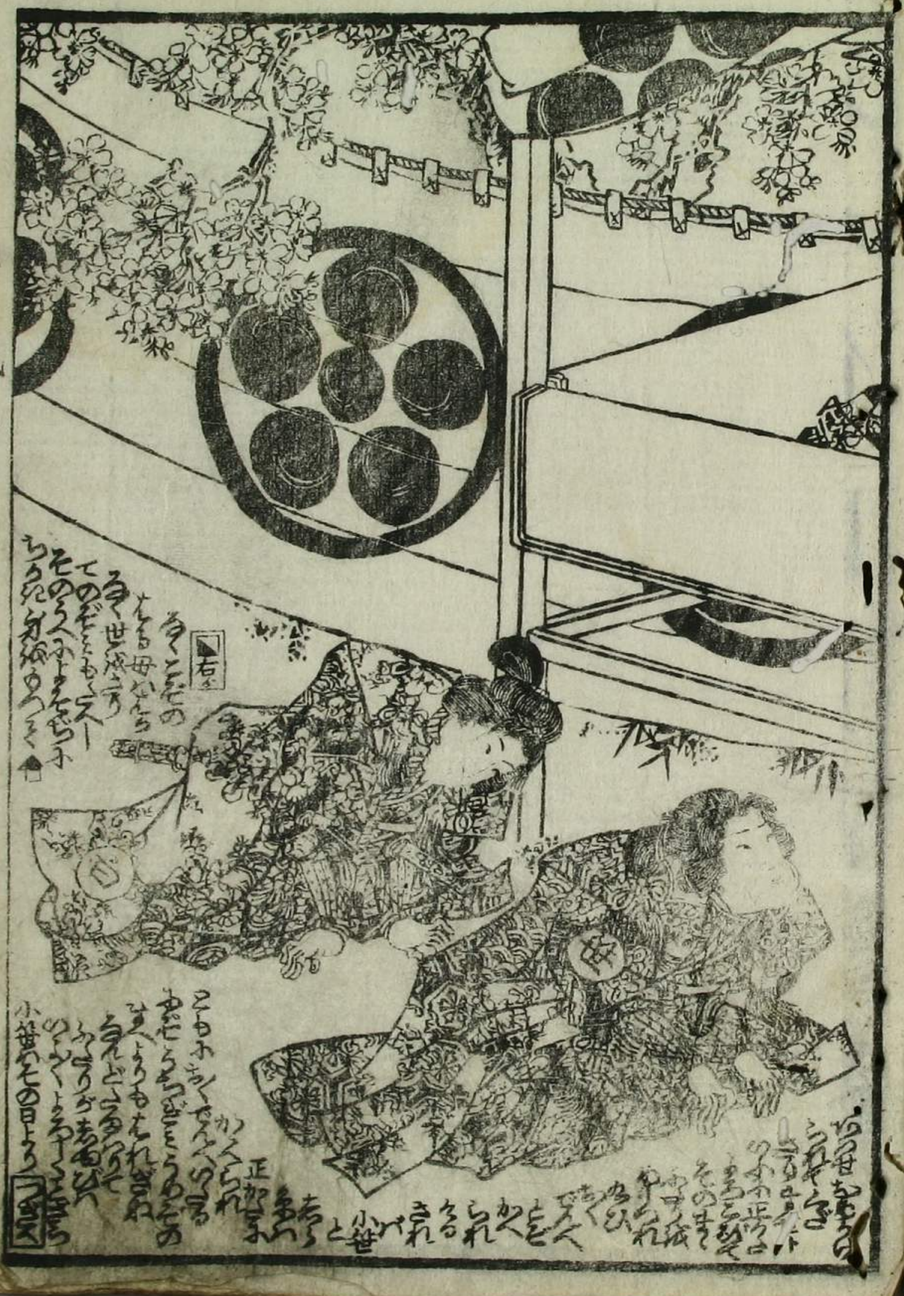
早瀬ヶ淵

坂四郎ヶ淵

大領正方
後ホ正方の愛妾
苅根の方

頂城白糸





美雪 時代加賀見

自四編八編迄 春水作 春市画出板 國貞畫

四編五編は湯尾刀監が正方と毒殺をさんと做つる浅由縁之丞が奸智をもて故意と毒計を破るの段より明神の杜かねて初て由縁が刀監が習中の機密を明とふ小笹が出身の趣を続て正方の目通をて小笹白糸が試合の一段終に両人召抱られて小笹は笹尾と改名し白糸は荊根と云る支又かの化花坂四郎早浪が怨念鷲眷とあり由縁が奸計を助るの奇談忠臣丹下を謀るの赴き六編は丹下を謀りて自殺させかの鷲眷の血を以て正方が心を乱させ荊根を妾とあるその一計丹下が養女と歌が難義して鳥屋方助が娘思羽が救ふのうて可笑きわるの物語思羽が小萩の夫西之丞が憂暮の情態七編は思羽が意情ふ暮り鶏の姿でうたの一説白山雪若が方と相計ひて刀監等が隠謀を探るの方便八編は鳥屋方助が鶏て由縁が西ふて買んとのふ方助が義侠の一段刀監が計られて既に大事の破るを由縁が蝶妖の術ゆく防ぎいよ〳〵多賀の騒乱ふ

五編下

牡丹美婦形見

五篇

下河先

多女茶の
書名さうへ

ひちりの名
そんな夫婦の

芝神明前
多賀屋
そう兵衛

坂
由
早

御祭禮

丙辰迺歳大當

箕田青洲淨書

丹

毋

安政三丙辰春新板目録

壮雪美談 時代加賀見 四編より八編まで 爲永春水作 一壽齋國貞画

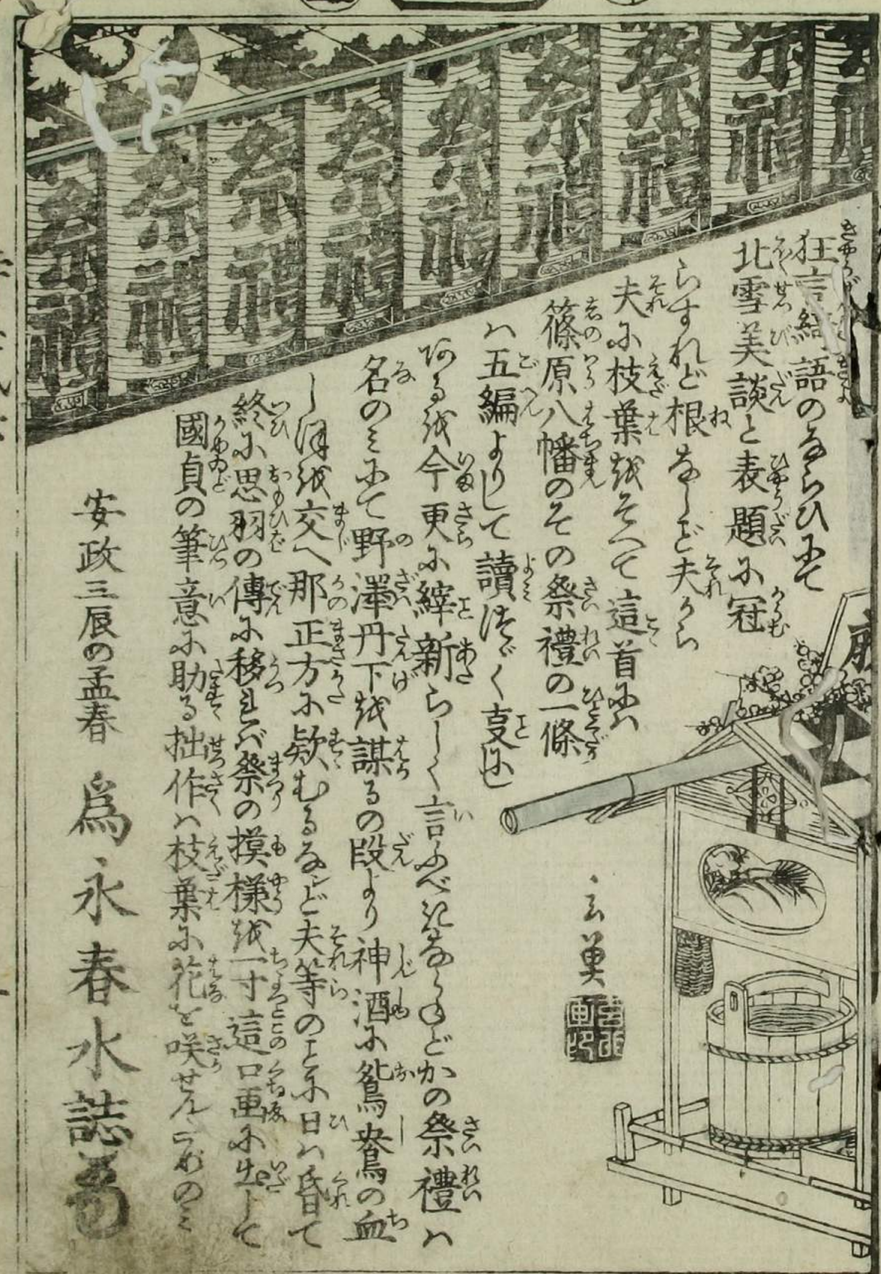
鄙物語業なる我 四編五篇 光貞画 國貞画

度外武藏鐙 六編 度貞画 丑貞画

雜談雨夜質庫 初編より追出版 爲永春水作 一陽齋豊国 一曜齋國郷画

地本草紙問屋 若林堂 芝神明前 若狭屋與市板

北雪美談
時代鏡
六編上



狂言綺語のそらひゝそ
北雪美談と表題ふ冠
らすれど根なしゝど夫ら
夫ふ枝葉ゝ紙そゝて這首ゆ
篠原八幡のその祭禮の一條
ハ五編よりして讀ほぐく支ふ
なる紙今更ふ綽新らしゝく言ふべゝ紙ゝどかの祭禮ハ
名のミゆて野澤丹下紙謀るの段より神酒ふ鴛鴦の血
しゝ紙交へ那正方ふ欲むるゝど夫等のことふ日ハ昏て
終ふ思羽の傳ふ移しゝ祭の模樣紙一寸這口重ふ生して
國貞の筆意ふ助る拙作ハ枝葉ふ花を咲せんゝめのミ

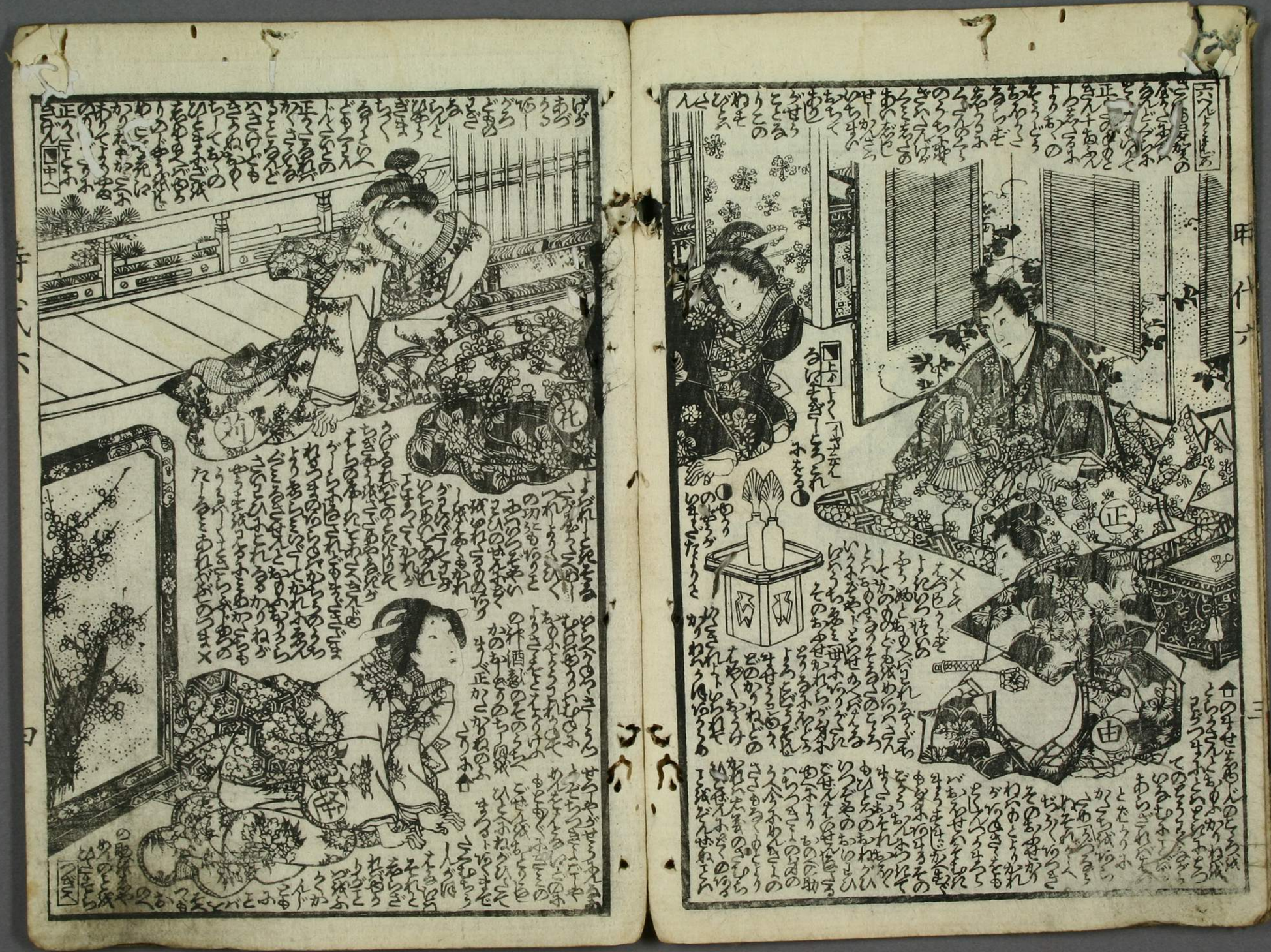
安政三辰の孟春　爲永春水誌

花沢本街の市客
鳥屋万助
下奴
喜作

女児
思羽

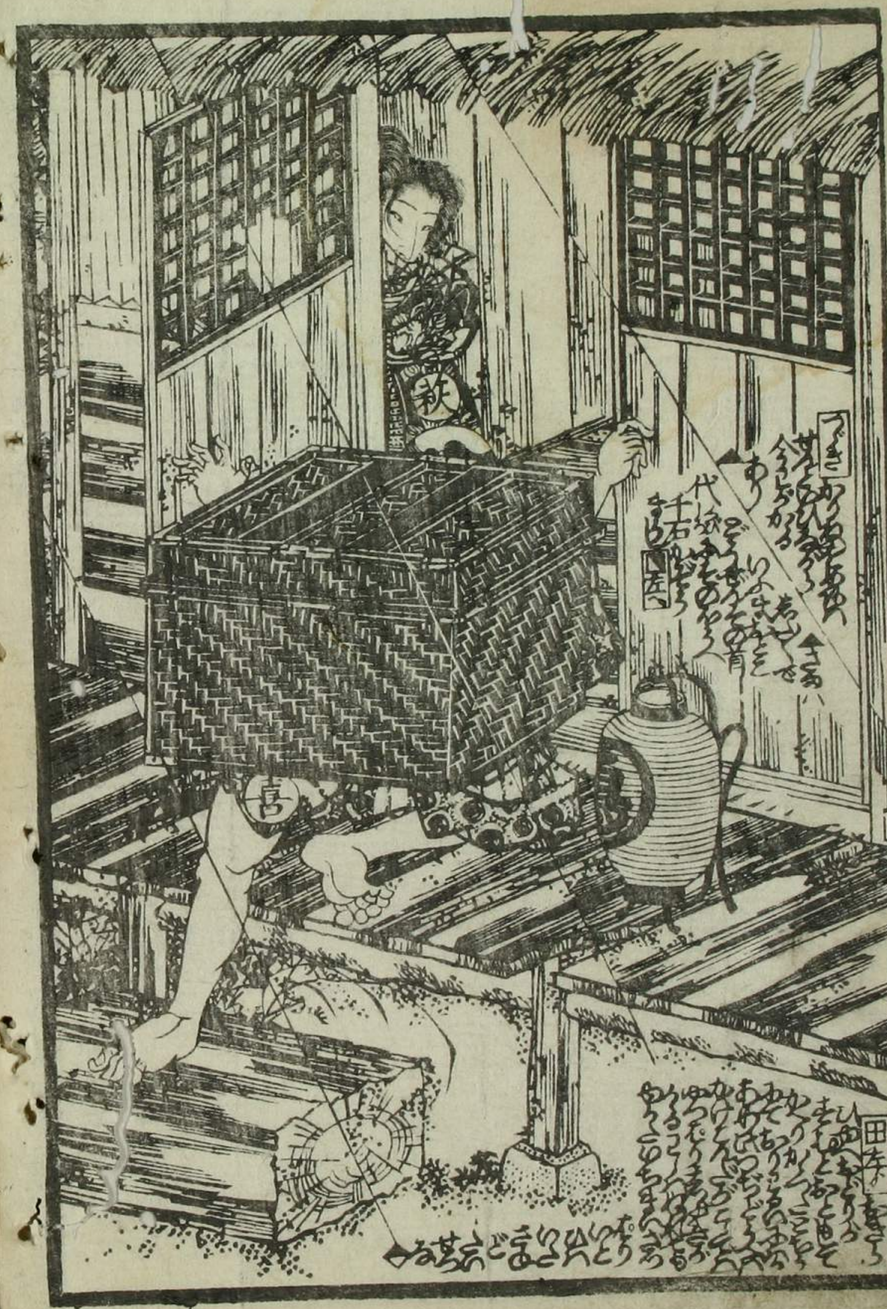
惡漢、
圖部六
野澤要之助
光照

丹下ゞ類女
小萩



由
正

刈



北雪美談 時代加賀見

自四編八編迄 春水作 國貞畫

四編五編ハ湯尾刀監が正方を毒殺なさんと倣つる由縁之丞が奸智をもて故意と毒計を破るの段より明神の杜にかゝるて初て由縁が刀監に冒中の機密を明さるゝの毒婦小笹が出身の趣を續て正方の目通にて小笹が荒駒を乗るよりして小笹白糸が試合の一段終に両人召抱られて小笹ハ笹尾と改名さし白糸ハ荊根となる吉又がの化花坂四郎早浪が怨念鴛鴦とあり由縁が奸計を助るの奇談忠臣丹下を謀るの赴き六編ハ丹下を謀りて自殺させかの鴛鴦の血しほを以て正方が心を乱させ荊根を妾となせの一計丹下が養女小萩が難義で鳥屋万助が娘思羽が救ふなのいろて可笑とある物語思羽が小萩の夫要之助に戀慕の情態七編ハ思羽が戀情に募り鶏の姿でなすその一説白山雪若が阿貞の方と相計りて刀監等が隠謀を探るの方便八編ハ鳥屋万助が鶯と由縁が百両を買んといふより万助が義侠の一段刀監が計られて既に大事の破まんとすない由縁が妖妖の術にて防ぎいよ〳〵多賀の騒乱になる

同門
若林壽梓
一壽亲
國貞画
外題曲亭馬琴
六編下

社会美談

時代鏡

春水作

國貞画

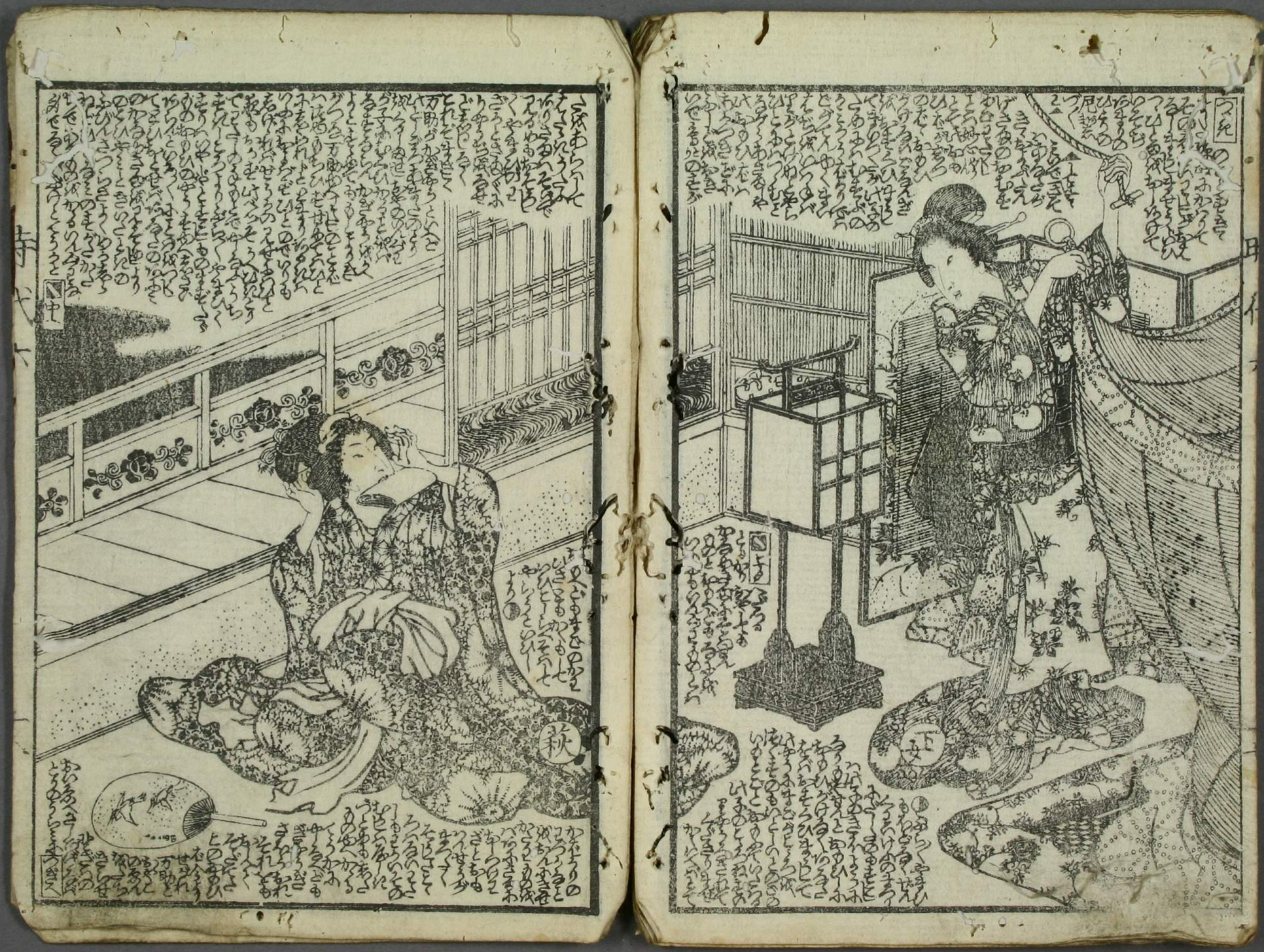
六編下

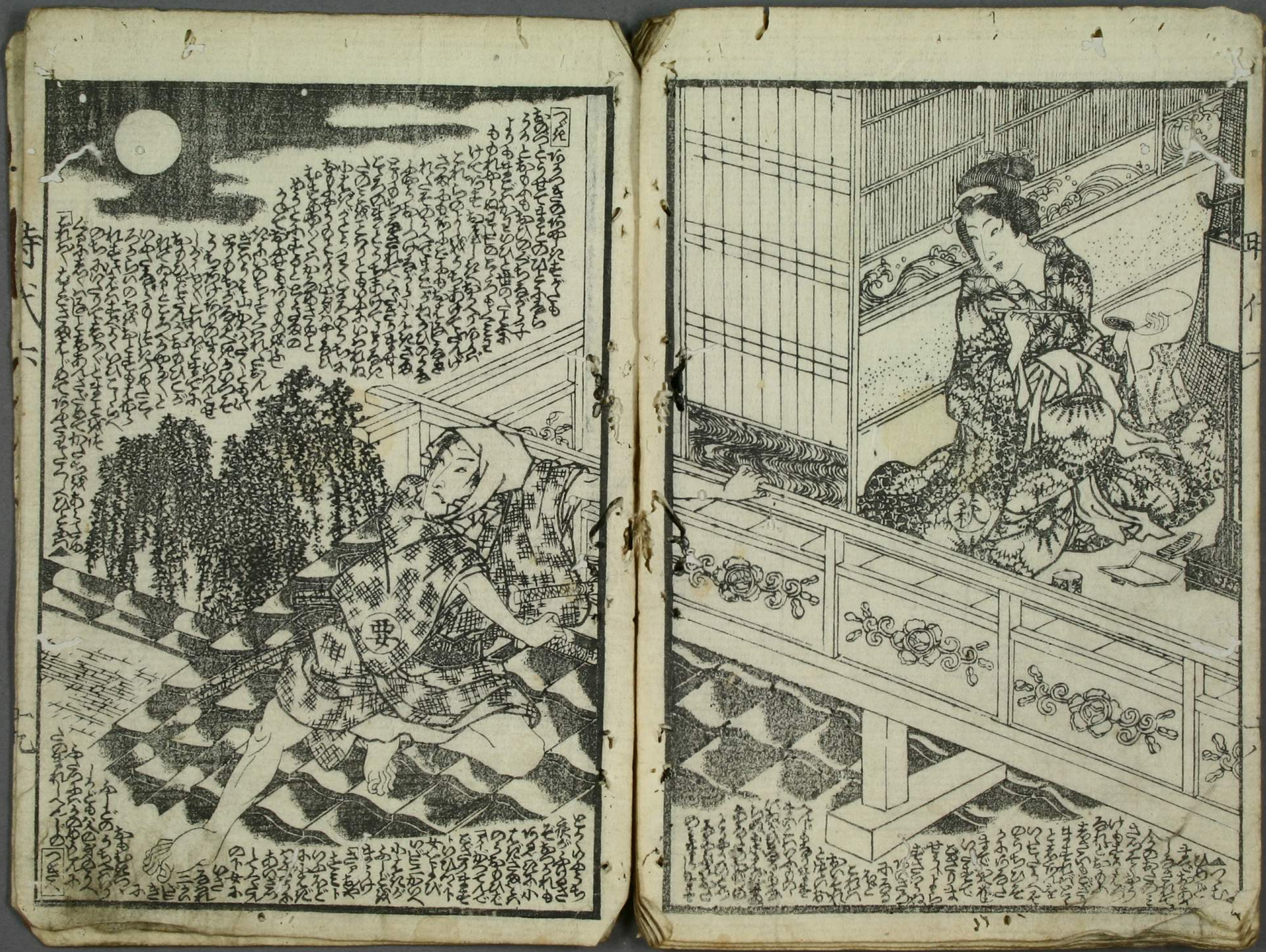
丙辰新春發行

若狭屋壽販

要

温





安政三丙辰年春新版目録

壮雪美談 時代加賀見 四編より 八編まで 爲永春水作 一壽齋國貞画

鄙物語業なる我 四編五篇 光貞改 國貞画

度訓武蔵鑑 初編 廣賀改 國貞画

雑談雨夜質庫 初編より追々出板 爲永春水作 一陽齋豊国 一曜齋國郷画

此追物語年玉りの たうう入第入金ゑ 会入出来毛皆伝年 ゑかくもの巻用ゆき 幸帝上人

地本草紙問屋 ㊟ 若林堂 芝神明前 若狭屋與市板